

潟環境研究所ニュースレター

Wetland Environment Research Laboratory

創刊号 2014年7月

潟の魅力と価値を再発見・再構築。潟と人とのより良い関係を探求

- ・潟環境研究所 月例会議から …………… P.2
「田んぼダムは水質改善にも貢献するのか？」
「湖沼における水生植物相の変遷とこれから」
- ・素顔の潟スナップ…………… P.3
- ・ミニ知識～知ッテタ？カタ？カタ？…… P.3
- ・潟のエッセイ「佐潟のウナギ」…………… P.4

ごあいさつ

新潟市潟環境研究所 所長 大熊 孝

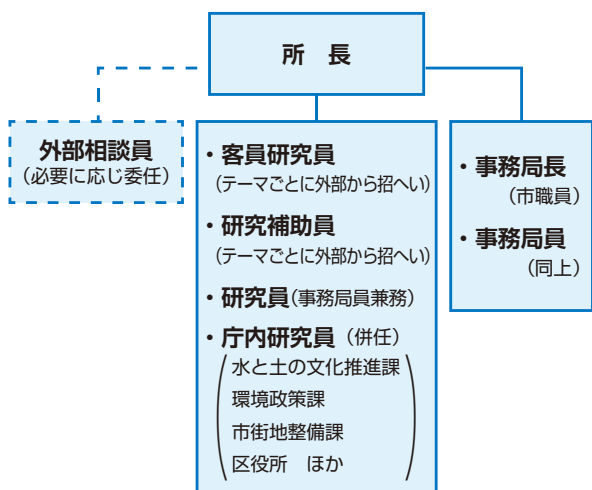


越後平野には古くから潟と呼ばれる湖沼が点在し、人々の生活は潟と密接にかかわっていました。本市にも、地域の暮らしに根差した「里潟」ともいうべき個性豊かな潟が多く残っています。

当研究所は、これらの潟について、その魅力や価値を再発見・再構築するとともに潟と人とのより良い関係を探求するため、ことし4月に発足しました。自然環境や歴史、暮らし文化などについて、庁内の関係課はもちろんのこと、潟に関わる多くの皆さまと連携しながら、広く一体的に調査・研究を進めてまいります。

このたび、当研究所の活動内容や潟の魅力を発信する機関紙を創刊いたしました。潟への関心を深めていただき、潟の魅力に触れるきっかけにさせていただけると幸いです。

組織概要



所長

・大熊 孝：新潟大学名誉教授、NPO法人新潟水辺の会代表

客員研究員

- ・吉川夏樹：新潟大学 農学部 生産環境科学科 准教授（農業水利）
- ・志賀 隆：新潟大学 教育学部 自然情報講座 准教授（生物多様性・分類）

研究補助員

- ・太田和宏：赤塚中学校 地域教育コーディネーター（歴史的調査）
- ・井上信夫：生物多様性保全ネットワーク新潟事務局、
環境省 希少野生動物植物種保存推進員（生物多様性・淡水魚類）

研究員

- ・林 絢子：潟環境研究所 学芸員（民俗学）
- ・丸山紗知：潟環境研究所 学芸員（生物学）

調査・研究の方針

- ・「潟」を単なる自然ではなく、人と関わりの深い「里潟」という認識の下、調査・研究を行う。
- ・研究員等は、それぞれが潟の自然・歴史・文化などに関する研究テーマを持ち、自発的に調査・研究を進める。
- ・関係者による月例会議を持ち、連携を図りながら、調査・研究したことなどを共有する。
- ・現地調査を重視するとともに文献・資料を収集・整理・保存し、後世への伝承に努める。
- ・シンポジウムなどにより、調査・研究の成果を公表するとともに、紙媒体やインターネットによる広報に努める。

潟環境研究所 月例会議から

調査・研究の成果などの情報を共有し、関係者間の連携を図るため、月例会議を開催しています。
5月・6月には、客員研究員が研究テーマに関連する講義を行いました。概要の一部を紹介します。

田んぼダムは水質改善にも貢献するのか？（5月21日 第2回会議）

吉川 夏樹 客員研究員／新潟大学農学部准教授

近年の気象条件の変化や都市化の進展によって、水害対策の見直しが行われています。こうした中、新潟市では水田を利用した水害対策「田んぼダム」の取り組みが広がっています。

田んぼダムとは、水田に排水マスを設置することで、大雨の時に水田に雨水を貯留し、時間をかけて排水することで、排水路への流量が抑制できるという試みです。

田んぼダムは、仕組みが簡単で低コストであるといったメリットがあり、面的に広がる水田を利用することで、大きな効果が期待できるという点で注目されています。

一方、田んぼダムは、協力農家がメリットを感じられないのが普及に向けた大きな課題です。現在、田んぼダムの水田土砂流出抑制効果に着目して、調査・分析を実施しています。田んぼダムが、水田からの肥沃な土の流出を抑えることに効果があれば、農家のメリットになる上、河川や潟などの水質汚濁の軽減、土砂の堆積による治水機能の低下を抑えられるのではないかと考えています。



田んぼの水のサンプリング
(2014年4月、新潟市東区にて)

(平成26年度研究テーマ：田んぼダムによる潟の水質改善に関する研究)

湖沼における水生植物相の変遷とこれから（6月11日 第3回会議）

志賀 隆 客員研究員／新潟大学教育学部准教授

水生植物、いわゆる「水草」は、一生のうちのある時期に水中環境を必要とする植物です。日本には約200種の水草が生育していますが、その3分の1以上の種は水質の悪化や生育地の開発などにより、絶滅が危惧されています。

佐潟、鳥屋野潟、福島潟にも、かつて多種多様な水草が生育していたことが分かっていますが、多くの種が失われてしまいました。このように失われてしまった水草は、もう潟に戻ってくることはないのでしょうか？

植物のタネの中には、数十年を過ぎても生きているものがあります。

ですから、土壌に含まれているタネ（埋土種子）を地表にまき出すことによって、失われた水草たちを再生できるかもしれません。

初夏の調査では、福島潟周辺の耕作されなくなった水田を掘削してできた池において、潟内で失われた水草が再生していることが明らかになりました。なかには埋土種子由来のものと考えられる水草もありました。失われてしまった水草たちも、タネの状態ですら土の中にはまだたくさん生き残っているのかもしれません。



水草調査の様子
(右が志賀研究員。2012年8月、韓国にて)

(平成26年度研究テーマ：福島潟の植生の現状と埋土種子集団の構成)

素顔の「潟」スナップ <1>



潟…どんな風景が思い浮かびますか？

このコーナーでは、潟環境研究所スタッフが潟に行って、見て、感じた「潟」の素顔を紹介します。

ドンチ池 (西区)



中権寺にある霊園の奥。看板などがないため、発見難易度やや高め。やぶをかきわけたどりつくと、そこには清楚なスイレンの花が！

とやのがた 鳥屋野潟 (中央区)



6月の乗船体験イベントでは、潟の中央まで行くことができました。街並みが遠くに見え、潟の広さを実感！

みたらせがた 御手洗潟 (西区)



近隣の神明社への参拝前に、手や顔を洗い清める手水（ちょうず）池として名が付いた由緒ある潟。5月末にはキショウブが咲き誇っていました。

うわせきがた 上堰潟 (西蒲区)



角田山の麓に広がる上堰潟。地元の方が田舟を漕ぐその姿がとにかくカッコいい！皆さんもイベントなどで体験乗船する機会があるといいですね。

にかつつみ 仁箇堤 (西蒲区)



仁箇堤のゲート。「角（かく）落とし」といって、積み上げた角材で流量を調節できる昔ながらの仕組みです。間近で見ることができます。

さかた 佐潟 (西区)



写真は、かつて岸辺の水田だった場所に復元された水路。地元では「ど」と呼ばれています。野鳥観察舎「潟見鳥」のすぐそば。

ミニ知識

知ッテタ？カタ？カタ？

Q さて、ここはどこでしょう？



桜の季節、ボート遊びをする人たちで大変にぎわっていますね。



➡ 答えは、4ページにあります



イラスト：太田和宏

「潟」のエッセイ

① 佐潟のウナギ

研究補助員 太田和宏

7月29日は、土用の丑の日。この日によく食べられる食材といえばウナギですね。私たちが普段食すウナギは、「ニホンウナギ」といい、ことし6月12日に絶滅危惧種に指定されました*。

ウナギは、ビタミンA・Bが豊富に含まれ、夏バテや食欲不振防止に効果があるといわれていますが、旬は、晩秋から初冬。

そもそも、土用の丑の日に、ウナギを食べる習慣が生まれたのは、江戸時代。平賀源内が発案したという説が最もよく知られています。一説には、土用の丑の日に「う」の字がつくものを食べると夏バテしないという習慣があったとされています。

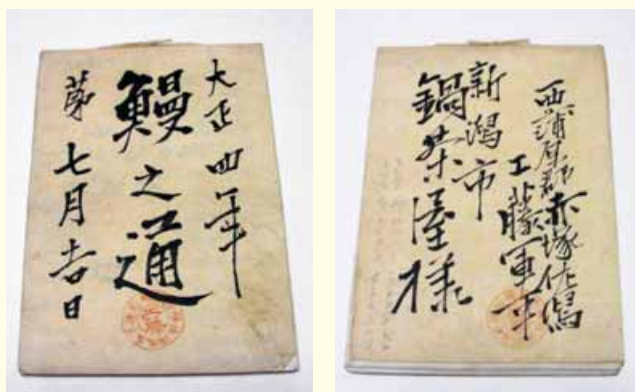
今や絶滅危惧種となってしまったニホンウナギですが、西区赤塚地域に興味深い史料が残されています。『鰻之通』といい、大正4年に西蒲原郡赤塚村（現・西区赤塚）の佐潟で捕れたウナギを、新潟の料亭、鍋茶屋に納めたという帳簿です＝写真＝。

当時、明治・大正時代の佐潟の魚は、佐潟が地下水のみを水源としているため、捕りたてであっても臭みが少なく、新潟県内の名産品として知られ、特にウナギは重宝されていました。ウナギは、佐潟が荒れる夜、下流へと下りることから、漁師が水門付近でわなを仕掛けて捕っていました。多いときには、一晩で50貫目（約188キログラム）と大漁だったこともあったそうです。佐潟のウナギは、今も昔も稚魚放流をしています。

赤塚には、ウナギ漁で財を成した「ウナギ御殿」と呼ばれる家が建てられ、今日も残されています。

もう一つ、興味深い事柄としては、明治11年9月16日に、明治天皇が北陸東海御巡幸に赤塚の富農、中原藤蔵宅で昼食をお召しになった際、佐潟のウナギが献上されたという文献もあります。どのような料理をお召しになったのか、詳しいレシピが残されていませんが、とても興味がありますね。

※国際自然保護連合が2014年6月12日に発表したレッドリストの最新版に、ニホンウナギが絶滅危惧種として記載されました。



ウナギを鍋茶屋に納めた帳簿『鰻之通』
左：表紙、右：裏表紙

ミニ知識

知ッテタ?カタ?カタ? (3ページ)

【答え】 昭和30年頃の鳥屋野潟（現・中央区）です。

後方に弁天橋と松の木が写っていますね。花見の季節になると、ボートを借りるのに2時間待ちになるほどのにぎわいだったそうです。最盛期には10軒ほどの貸ボート屋があったそうですが、現在営業しているのは、弁天橋のそばにある栄徳荘1軒になってしまいました。

(写真提供：栄徳荘・後藤 洋さん)

潟

発行

平成26年7月

新潟市地域・魅力創造部 潟環境研究所事務局

〒951-8550

新潟市中央区学校町通1-602-1（市役所本館4階）

☎ 025-226-2072

fax 025-224-3850

e-mail kataken@city.niigata.lg.jp

URL <http://www.city.niigata.lg.jp/shisei/kataken/index.html>

Facebook
ページ

